

于頔「杼山集序」覺書

小論は、皎然文集に付された于頔の序が、皎然の文學をどのように評價し文學史のなかに位置づけるのか、その仕方が當時の文學史記述の文脈のなかにどのように位置づけられるのか、ということについて、概略を述べようとするものである。

文集序の記述は、作者本人の文學觀と文學史觀について、一定の了解のうえになされるはずである。ということからすれば、皎然自身の文學觀と文學史觀がどのようなものか、明らかでなければならぬ。それらはしばしば、詩句の表現のなかで表明される。また皎然の場合、詩論の著述があり、そのなかにある程度の體系を備えた言説として表されてもいる。しかし、これらのことについて筆者には十全な解説を施す準備がまだない。ここで

乾 源 俊

は、編者于頔の理解がどのようなものをまず確認することとし、それが皎然自身の考えと一致するのか齟齬を生じているのかなど、派生する興味深い問題についてはさしあたりの考えを述べて、後の考察を期すこととした。

一

文集序の内容に入る前に、編者于頔の経歴と文集編纂に至る経緯について、あらまし見ておきたい。

于頔、字は允元、河南の人。恩蔭により任官、華陰尉、侍御史を経て、吐蕃計會使として才能を發揮、長安縣令・駕部郎中に拔擢される。その後、湖州、蘇州の刺史を歴任、陝虢觀察使となる。徳宗の貞元十四年（七九八）、

襄州刺史・山南東道節度使となり、吳少誠の反亂を鎮壓した功により襄州大都督府、更に檢校尙書左僕射・同中書門下平章事を加えられ、燕國公に封ぜられる。憲宗のときに戸部尙書となり、元和十三年（八一八）に卒している。『舊唐書』卷一五六、『新唐書』卷一七二に傳がある。

皎然と交流をもったのは湖州刺史のとき。賈晉華『皎然年譜』（廈門大學出版社、一九九二）によれば、貞元七年秋から十年（七九一―七九四）にかけて、皎然七十餘歳の最晩年にあたる。于頔の年齢は詳かでないが、年若い新進の官僚として相見えたことであろう。赴任の後、「郡齋臥疾贈畫上人」詩を贈って面會を求め、皎然は「五言奉酬于中丞使君郡齋臥病見示一首」を返している。直後、貞元八年正月に集賢殿御書院に皎然文集を進奉せよとの勅命が下り、編纂の任にあたった。その経緯が于頔序本文に詳しく述べられ、集卷一冒頭には兩者の應酬の詩が置かれる。

于頔に關して、いま一つ特筆すべきは、その後、襄州節度使時に『龐居士語錄』を編纂していることである。龐居士とは、石頭希遷と馬祖道一に參じたことが語録の内容から知れる人物。（入矢義高譯注『龐居士語錄』筑摩書

房、一九七三 參照）編者于頔自身も、このようにして南宗禪の法統と繋がりを持つことになる。于頔の詩文として遺るのは、他に詩一首と、文三篇のみ。文章家として特に顯れた人物ではないが、いずれも佛教に關係する重要な書物の編纂をしていることが注目される。

兩者の交流がどのようなものであったか、應酬の詩によって概観しておく。テキストは汲古閣本に従う。

于頔は州の官舎で病に伏しており、皎然に詩を贈って會いたい旨を傳えた。詩型は五言古詩、換韻して四種の韻を用いる。

郡齋臥疾贈畫上人（上人早名皎然晚字畫）

湖州刺史 于頔

州の官舎で病に伏せる詩、畫上人に贈る（上人ははじめ皎然と名のり、おそくに畫とあざなした）

湖州刺史 于頔

おなじ設定の詩の先例に謝朓「在郡臥病呈沈尙書」詩（『文選』卷二六）がある。謝朓は于頔「杼山集序」の本文に名が擧がる、皎然の先祖のひとり。このとき于頔の

念頭にこの詩があつたと思われる。

一―四句は皎然の文學の修養と文學者としての評價について、五―八句は皎然の佛道修行と佛僧としての評價について述べる。九―一二句はそのような皎然の佛性と説法の、わたしへの影響について述べる。用韻は『廣韻』入聲二十陌（格・客・伯・白・澤）二十一麥（頤）同用。

夙陪翰墨徒	夙に翰墨の徒に陪し
深論窮文格	深く論じて文格を窮む
麗則風騷後	麗則あり 風騷の後
然公我詞客	然公 我が詞客なり
晚依方外友	晩に方外の友に依り
極理探精頤	理を極めて精頤を探る
脇合南北宗	脇合す 南北の宗
晝公我禪伯	晝公 我が禪伯なり
光明性不染	光明 性 染まらず
故我行貞白	故に我が行は貞白なり
隨順令得解	隨順して解を得しむ
故我言芳澤	故に我が言は芳澤なり

はやくから文學者の仲間に入つて、議論をふかめ文章の風格をきわめた。

詩經や楚辭のあと典麗文雅な傳統を受け繼ぐ、皎然どのはわが詩人である。

おそくに世の外の友と交わつて、ことわりをつきつめ奥深い道理をさぐつた。

南北兩宗のおしえをびたりとあわせる、晝どのはわが禪の先達である。

光り輝く佛性がけがれることはない。だからわたしの行いは正しく潔白になる。

説法にしたがつて悟りを得させる。だからわたしのことは艶やかになる。

皎然が早年に科擧に合格すべく文章の研鑽を積んでい
たことは「七言述祖德贈湖上諸沈」詩（集卷二）に「初
看甲乙矜言語、對客偏能鵲鴿舞」と述べられる。また于
頤は、石頭と馬祖に參じた龐居士の語録を編んでおり、
南宗禪の法統と關係が深い。その于頤が、北宗禪にちか
い皎然を評して、南北兩宗の主旨にかなうという。この
言ひ方には、立場を異にする相手に對する慮りがあるだ
ろう。

一三―一六句は湖州の山水の美しさと埋藏する珠玉の輝きを述べ、その精華を得た詩人によつてすばらしい詩句が生みだされることを導く。一七―二〇句は皎然詩のあざやかな詞藻と則にそつた韻律を形容する。二一―二四句は山水とそれを鑑賞するものの關係について、自身が得た理を述べる。下平聲二十一侵（潯・岑・金・音・琴・深・心）。

潯水漾清潯	潯水	清潯漾い
吳山橫碧岑	吳山	碧岑横わる
含珠復蘊玉	珠を含み復た玉を蘊む	
價重雙南金	價は重し 雙南金	
的皦曜奇彩	的皦として奇彩曜き	
淒淒流雅音	淒淒として雅音流る	
商聲發楚調	商聲 楚調に發し	
調切諧瑤琴	調は切なりて瑤琴に諧う	
吳山爲我高	吳山 我が爲に高し	
潯水爲我深	潯水 我が爲に深し	
萬景徒有象	萬景 徒に有象	
孤雲本無心	孤雲 本と無心	

潯水は清らかなふちにみずが搖らめき、吳山はみどりの峰がよこたわる。

山水は珠玉の輝きをうちに含み、その價值はかの雙南金よりもおもしろい。

あざやかにすばらしい彩りがはえ、すっきりと端正な音がゆきわたる。

商の音が楚の調べで發せられ、調子はびつたりと玉琴の音にかなう。

吳山はわたしにとつて高くもあれ、潯水はわたしにとつて深くもあれ。

だが、すべての景色はただかたちがあるだけ、ぼつんと行く雲は無心である。

「含珠」「蘊玉」は、山水が美しい寶石を埋藏している意。引いて山水の輝きを喩える。「的皦」「淒淒」は于頔詩の詞藻と音韻を玉の輝きと響きに喩える。「商聲」以下二句は音樂の和聲に喩える。「吳山」「潯水」の二句は、山水は高いとか深いとか、それを見るもののはからいによつてさまざまな様相を見せてくれる、しかしそれ自體は無心でとくに意味をもたない、という意か。こうした言い方の先例として、謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」

詩（『文選』卷二二）の「情用賞爲美、事昧竟誰辨」が想起される。「有象」はかたちがあること。「無心」は自然物である雲にはそもそも分別する心がないこと。『老子』第二十一章「忽兮恍兮、其中有象」、陶淵明「歸去來辭」（『文選』卷四五）「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」等を踏まえよう。

二五―二八句は椅桐によって皎然詩の韻律を、鍾子期の故事によって鑑賞者としての自身を喩える。二九―三二句は日ごろ仰ぎ慕っていた皎然に面會したい意を述べる。上聲三十六養（響・賞・仰・想）。

衆木豈無聲	衆木	豈に聲無からんや
椅桐有清響	椅桐	清響有り
衆耳豈不聆	衆耳	豈に聆かざらんや
鍾期有眞賞	鍾期	眞賞有り
高潔古人操	高潔なり	古人の操
素懷夙所仰	素懷	夙に仰ぐ所
覲君冰雪姿	君が冰雪の姿に	覲え
祛我淫滯想	我が淫滯の想を	祛わん

多くの樹木が音をたてるが、椅や桐にはとりわけ清

らかな響きがある。

多くの人は音楽を聞くが、鍾子期こそが眞の鑑識眼をもっている。

高潔な古人の氣風は、心のなかではやくから仰ぎ申しあげていた。

あなたのすつきりとしたお姿を目にして、滞った想いを拂いたい。

自然が奏でる音楽のなかでも椅や桐は特別、音楽の鑑賞者のなかでも鍾子期は別格。そのように特に優れた皎然の詩を理解するのは、眞の鑑識眼を持つこのわたしである。こうして兩者の關係を喩える。「椅」はいいざり、「桐」はきり。琴瑟の材となる。自然のなかに音楽があるという發想は、左思「招隱詩二首」其一（『文選』卷二二）に「非必絲與竹、山水有清音。何事待嘯歌、灌木自悲吟」とみえる。「冰雪姿」は氷のように澄みきったたずまい。ふつう仙人の容姿についてことばをここでは轉用した。「淫滯想」は久しく滯留して晴れぬ氣分のこと。

三三―三六句は柳惲詩によって描いていた映像と實際が齟齬していることを述べる。三七―四〇句は面會して

心の契りを結びたい旨を述べる。上平聲五支（衰・羸）
七之（詩・思・期） 同用。

常吟柳惲詩

常に吟ず柳惲の詩

苕浦久相思

苕浦 久しく相思う

逮此遠爲郡

此に遠く郡を爲むるに逮び

蘋洲芳草衰

蘋洲 芳草衰う

逢師年臘長

師が年臘長するに逢い

值我病容羸

我が病容羸るるに値る

共話無生理

共に無生の理を話して

聊用契心期

聊か用て心期を契らん

つねづね柳惲の詩を口ずさみ、苕溪の浦に思いをはせていた。

いま遠く湖州に赴任してみると、白蘋洲の芳しい草ぐさは枯れていた。

老師のお歳は長壽をむかえられ、わたしの病のさまはやつれ衰えている。

生滅を超えたことわりについて語りあい、とりあえず心の交わりを約束したい。

つねづね口ずさみ心に想っていた柳惲詩の風景が、赴任してみたら違っていた。湖州の文壇がいまは衰えているという意。それを盛んにするのはあなただという含みを持つ。『爲郡』は刺史となって州をおさめること。

謝朓「在郡臥病呈沈尚書」詩に「坐嘯徒可積、爲邦歲已暮」、李善注に『論語』を引いて「善人爲邦百年、可以勝殘去殺矣」とある。あなたは老い、わたしは病んでいる。いわゆる生老病死の四苦にあるわけだが、佛教では一切皆空、生も滅もないと説く。このうへは生成變化をこえた深いことわりについて語り合い、あなたと心にあい許す交わりを結ぼうという。

これに對する皎然の返答は以下のようなものである。五言古詩、換韻して六種の韻を用いる。

五言奉酬于中丞使君郡齋臥病見示一首

五言詩 使君の于中丞どのが郡の官舎にて病に臥して詩を示されたのに應酬申しあげる一首

一―四句は自身の現況を、五―八句は于頔の施政について述べる。用韻は『廣韻』上聲三十三哿（可・我・

荷) 三十四果(坐) 同用。

宿昔祖師教

宿昔 祖師の教え

了空無不可

空を了すれば可ならざるは無し

枯槁未死身

枯槁 未だ死せざるの身

理心寄行坐

心を理めて行坐に寄す

仁公施春令

仁公 春令を施し

和風來澤我

和風 來たりて我を澤す

生成一草木

一草木を生成して

大道無負荷

大道 負荷する無し

むかし祖師が教えられた、一切が空であると悟すればすべてよしと。

枯れてはいるがいまだ死せぬ身、心を修めて行住坐臥に寄せている。

あわれみ深い于公は春の制令を布かれ、なごやかな風がわたしに恩澤をもたらしした。

一本の草、一本の木さえはぐくむ、まして天の大きな道など擔うまでもない。

發句は于頤に齡をいたわれ、「無生の理」を語り合

おうと述べられたのに返した。生成變化を超えた次元とは、畢竟「空」にはかならない。枯れてはいるがまだ死んではない。そんな身體で行住坐臥、日び心の修養に勤しんでいる。どうぞこぞやつてます、という含み。「祖師」とは中國禪の初祖達磨のことか。次いで新任の于公の施政について、一草一木にまで恩澤がゆきとどくそのこまやかさを褒める。そうであればおのずと大道は擔われると。

九一四句は于頤の佛教の素養に對する評價を述べる。

上平聲二冬(宗)三鍾(胸・蹤) 同用。

論入空王室

論は空王の室に入り

明月開心胸

明月 心胸に開く

性起妙不染

性起は妙にして染まらず

心行寂無蹤

心行は寂として蹤無し

若非禪中侶

若し禪中の侶に非ざれば

君爲雷次宗

君は雷次宗爲り

佛の教えを論ずれば入室の弟子、明月が胸臆に光り輝いている。

そなわる佛性は妙力をもち汚れない、心のはたらき

は寂滅に入りあとかたもない。

もし禪仲間でないとするば、あなたはかの雷次宗だ。

佛教の造詣において、于頔は論説も心境も高い域に達している。續く二句は、于頔詩の「光明性不染」をとらえ、心のはたらきは跡をとどめない、と付加して返した。禪修行の仲間に交えてもじゆうぶんであるが、そうでないとしたら、かの雷次宗のような存在だ、という。自身はさしずめ慧遠ということになる。

一五―二二句は于頔に詩を贈られたことについて述べる。入聲四覺（握）十九鐸（作・鶴・樂）通押。

比聞朝端名

比聞く 朝端の名

今貽郡齋作

今貽る 郡齋の作

眞思凝瑤瑟

眞思 瑤瑟に凝り

高情屬雲鶴

高情 雲鶴に屬す

抉得驪龍珠

驪龍の珠を抉り得て

光彩曜掌握

光彩 掌握に曜く

若作詩中友

若し詩中の友と作さば

君爲謝康樂

君は謝康樂爲り

ちかごろ朝廷にその人ありと名をお聞きしていたが、いま郡齋臥病の作を贈られた。

まことの思は玉瑟の音に凝結し、氣高いお心は天翔ける鶴につき従う。

黒龍領下の珠をえぐり取って、あざやかな光が掌のなかに輝いている。

もし作詩の友としたら、あなたはかの謝靈運だ。

湖州刺史赴任以前の于頔の經歷として、吐蕃計會使の仕事の評価により長安縣令・駕部郎中に拔擢されたことが傳えられる。「充入西蕃計會使、將命稱旨、時論以爲有出疆專對之能。歷長安縣令・駕部郎中。出爲湖州刺史」。（『舊唐書』卷一五六、本傳）于頔詩を褒める仕方は、まず詩の「思・情」を「瑤瑟・雲鶴」に喩える。そのうえで黒龍のあごの下にあるという得難い珠に重ねて喩え、いまそれがわが掌中に輝く、という二段構えになっている。謝靈運は皎然が先祖として詩人として仰ぐ、最上級に評價する詩人。このことは于頔「杼山集序」にも述べられる。いまそれに于頔を比べる。

二三―二八句は詩から窺われる于頔の人物について述べる。下平聲二十一侵（衿・心・深）。

盤薄西山氣

盤薄たり西山の氣

貯在君子衿

貯えて君子の衿に在り

澄澹秋水影

澄澹たり秋水の影

用爲字人心

用て字人の心と爲す

群物如鳬鷺

群物は鳬鷺の如く

游翱愛清深

游翱して清深を愛む

はてなくひろがる西山の氣は、貯えられて君子の胸のうちにある。

しずかにすんだ秋の水の影は、それによつてひとを育む心とする。

萬物は鴨や鷗のように、自由に天翔けて清く深いものをこのむ。

山水の氣と影とをうけて、あなたはすがすがしい氣持と慈しみの心にみちている。すべてのものは自由に天翔ける鳥のように、あなたの清らかさ深さに引き寄せられる。「西山氣」は隱棲を誘う山の爽氣のこと。『世說新語』簡傲の、王子猷の語「西山朝來、致有爽氣」を踏まえる。「秋水」は秋に流量が多くなった河川のこと。『莊子』秋水の「秋水時至、百川灌河」に由來する語。詩人

は山水の精華を得て生まれ、その得たものから詩が生まれる。こうした考え方に則つて于頔は皎然の詩を評價していた。この定式を踏みつつ、于頔が修辭と韻律への評價に傾いていたところ、皎然はより人柄の方へと振つて敘述を進める。

二九―三二句は于頔詩の品第を定める。入聲三燭（躅・足）。

格居第一品 格は第一品に居り、

高步凌前躅 高歩 前躅を凌ぐ。

精義究天人 精義 天人を究め、

四坐聽不足 四坐 聽きて足らず。

格は第一品にあつて、前人をはるか高く踏み越えて行く。

こまやかな道理で天と人との關係をときあかし、一座四周のものは聞き飽きない。

于頔の詩の格は第一品、先人も及ばない。形而上的な課題を解明し、大向こうをうならせる。手放しの褒めよう。于頔詩の「吳山爲我高、晉水爲我深。萬景徒有象、

孤雲本無心」の部分を使うのか、それとも別に書いたものを指してのことか。于頔「杼山集序」には彼に詩を論じた著述があつて皎然が序を依頼した旨を述べており、皎然があらかじめ彼の書いたものを讀んでいた可能性はある。

三三―三六句は于頔の柳惲詩への言及について、三七―四〇句は于頔の養生について、四一・四二句は面會要請への返答を述べる。上平聲十七眞（蘋・辰・人）十八諄（春・淳）同用。

伊昔柳太守

伊昔 柳太守

曾賞汀洲蘋

曾て汀洲の蘋を賞す

如何五百年

如何ぞ五百年にして

重見江南春

重ねて江南の春を見るとは

公每省往事

公 毎に往事を省み

詠歌懷昔辰

詠歌して昔辰を懷う

以茲得高臥

茲を以て高臥を得て

任物化自淳

物化の自ずから淳きに任す

還因訪禪隱

還つて禪隱を訪ぬるに因りて

知有雪山人

知る 雪山せっせんの人あるを

その昔、太守の柳惲は、汀洲の白蘋をめでて詩を詠んだ。

どういふことか五百年後に、また江南の春の風景にめぐりあうとは。

于公はつねづね往時のことをふりかえり、歌を詠んで昔の時間をなつかしむ。

いま病に臥すところとなり、物の變化の敦厚な原理に任せておられる。

かえつて禪に隠れる者を訪うことで、雪山の修行者に出くわすことになるかも知れぬ。

「汀洲蘋」とは柳惲「江南曲」（『玉臺新詠』卷五）「汀洲採白蘋、日落江南春」を指す。「五百年」とは聖人が五百年ごとに現れる考え方に則った言い方。『孟子』盡心下に「由堯舜至於湯五百有餘歲、…由湯至於文王五百有餘歲、…由文王至於孔子五百有餘歲」とある。これに關して『詩式』卷三、論盧藏用陳子昂集序には、盧藏用が陳子昂を「道喪五百年而有陳君」とするのに異議を唱えて、「豫因請論之曰、司馬子長自序云、周公卒五百歲而有孔子、孔子卒五百歲而有司馬公。邇來年代既遙、作者無限。若論筆語、則東漢有班張崔蔡。若但論詩、則魏

有曹劉三傳、晉有潘岳、陸機、阮籍、盧諶、宋有謝康樂、陶淵明、鮑明遠、齊有謝吏部、梁有柳文暢、吳叔庠、作者紛紜、繼在青史。如何五百之數獨歸於陳君乎」という。

五百年の数はひとり陳君にのみ歸するのではないとし、評價すべき多くの詩人のひとりに柳惔を数えている。ここでは于頔を、その柳惔のあとに付ける扱いをしていることになる。于頔詩で、衰えた湖州の文壇を盛り返すのはあなただと言われたのに、于頔の詩こそそうであると返したもの。「高臥」は漢の汲黯の故事を踏まえる。汲黯の治世は、部下を選んで任せ大筋をいうのみで、細部に拘らなかつたがよく治まった。天子が病氣がちの彼を淮陽太守に任じようとして、臥したままで治めてほしいと言ったという。『史記』卷二二〇、汲黯傳に「吾徒得君之重、臥而治之」。用語は謝朓「在郡卧病呈沈尚書」詩「淮陽股肱守、高卧猶在茲」を取った。

「禪隱」は自身のこと。「小隱は陵數に隠れ、大隱は朝市に隠る」。(王康琚「反招隱」詩、『文選』卷二二)皎然が禪に隠れると自身が言う。「苕谿草堂自大曆三年夏新營泊秋及春彌覺境勝因紀其事簡潘丞述湯評事衡四十三韻」(集卷二二)に「吾師逆流教、禪、隱、殊古昔」、原注に「僧傳云、人皆隱於山、我獨隱於禪」と。「雪山人」は

釋迦の前身、雪山童子の話を踏まえる。釋迦は前身において雪山(ヒマラヤ)で修行していた。そのおり羅刹に變じた帝釋天から「諸行無常偈」の前半「諸行無常、是生滅法」を聞き、後半を求めて捨身したという。『大乘涅槃經』卷一五「いま佛教の求道者として、于頔をこれに見立てる。于頔が皎然を「冰雪姿」と形容したのを、あなたこそ「雪山人」修行中の釋迦である、と返したものの。

以上まとめると、一、于頔の詩が皎然の經歷の簡要なまとめとなっていること。文人士大夫としての過去と、佛僧としての後半生と、それらがあわさって現在の皎然となっている。二、詩の評価について、湖州に埋藏する玉を比喩媒體として、措辭と韻律の側面が強調されること。及び、紋景表現のなかで得られた理を語ること。三、皎然詩を評價する鑑識眼をもつのは自身である、と強調すること。四、面會の要請を述べるにあたり、ご當地の有名な詩を出していること。また、共通の紐帶として佛の教説が用いられること、など。

皎然の應酬詩は、これら諸點に應答するかたちとなっている。一、自身のありようへの言及、及び相手の施政

を褒めること。二、相手の佛教の造詣を評價すること。

詩の評價は、おなじく玉を比喩媒體とするが、より得難い黒龍領下の珠へと格上げされていること。詩人としての評價は、これも最上級の詩人、謝靈運に比していること。三、詩の風景の評價から、それを生んだひとの人格への評價へと移っていること。手放しの褒めようとなっていること。四、ご當地の詩を挙げたのに、文學史的な位置づけをしていること。自身に對する形容を巧みに佛教の典故を用いて返していること、などである。

于頔が面會をもとめるにあたり、皎然の經歷、及び著作に對する詳細な調査がなされていることが見てとれる。于頔詩が、賈晉華の言うように、赴任の歳の秋のうちに書かれたとすると、皎然文集編纂の下勅を見越して書かれているかのような、非常によく整ったものであるという印象を受ける。勅文「敕浙西觀察使牒湖州當州皎然禪師集」〔四部叢刊〕所收上海涵芬樓影印江安傅氏雙鑑樓藏景宋寫本『晝上人集』卷首)の日付は「貞元八年正月十日牒」とあるが、あらかじめ情報を得たうえで于頔の湖州刺史赴任があったと見た方がよいかも知れない。

なお、皎然にはこの他にもう一首、于頔に唱和した詩がある。『唐詩紀事』卷七一、僧靈澈の條に靈澈「九日

和于使君思上京親故」詩を載せ、皎然の作をその後に付けている。『四部叢刊』本には採録せず、汲古閣本には卷十「杼山集補遺」にこれを拾っている。「霽景滿水國、我公望江城。碧山與黃花、爛熳多秋情。搖落見松柏、歲寒比忠貞。歡娛在鴻都、是日思朝英」。賈晉華は于頔の皎然文集編纂後に詠まれたと推定する。

二

文集序にはその文學の文學史上における位置づけ、本人の經歷、編纂の経緯などが書かれる。その文學史の考え方には、おおきく分けて、古をよいとするもの、今をよいとするもののふたつがあり、前者は『漢書』藝文志・詩賦略に、後者は『宋書』謝靈運傳論に代表される。唐代の文學史は基本的に兩者の折衷型である。「與東方左史虬修竹篇書」に下降文學史觀を鮮明に提示した陳子昂と、その文學を文學史のなかに位置づけた盧藏用の「右拾遺陳子昂文集序」がひとつの規範となる。皎然自身の詩文には前者の下降史觀がまま窺えるが、ここで于頔は今の文學を評價する後者の文學觀に立つて文學史上の位置づけをする。それがこの時代の標準的な文學觀であり于頔がその考え方に與することが根幹にあるが、よ

り直接的な理由は皎然が謝靈運の後裔にあたることである。

以下、汲古閣本に従って本文を提示し、内容を吟味してゆく。

文集序と撰者の表記について。

杼山集序 朝議郎大夫守湖州刺史于頔撰

皎然文集はいくつかの異なつた名稱のもとに伝えられている。皎然文集を進呈せよとの勅文には「(湖州)當州皎然禪師集」としていた。于頔編集本にもとづく二種のテキストが今に伝えられ、より早期の體裁を遺す江安傅氏雙鑑樓藏景宋寫本(『四部叢刊』所收本)の卷首に附される于頔序には「吳興畫上人集」序とする。汲古閣本はこの系統の本に増補を加えたものである。その他『文苑英華』に「吳興畫公集」序、『郡齋讀書志』卷一八に「皎然杼山集十卷」、『直齋書錄解題』卷一九に「吳興集一卷」と。『全唐文』には「釋皎然杼山集」序とする。

撰者于頔の肩書きとして冠せられた「朝議郎大夫」は「朝議大夫」とするのが適切だろう。『嘉泰吳興志』卷

一八、碑碣に「袁高茶山述、在墨妙亭、唐朝義大夫使持節湖州諸軍事、守湖州刺史、護軍、賜紫金魚袋于頔撰。朝義郎前滁州長史上柱國徐璿書。蓋述刺史袁高所作茶山詩也」とある。

序の本文を全八段に分ける。第一段は詩の傳統が詩經から楚辭へと受け繼がれることを述べる。

詩自風雅道息二百餘年、而騷人作。其旨愁思、其文婉麗、亡楚之變風賦。

詩というものは、詩經の國風と大雅の傳統が途絶えて二百年にして、離騷の詩人屈原が出た。趣旨は憂愁にあり、表現は華麗であり、滅びゆく楚國の亂世のうたというべきか。

理念化されたものとしての「詩」を提示し、詩經から楚辭へと繋ぐ。『漢書』卷三〇、藝文志・詩賦略は、詩の歴史を風諭機能の喪失において捉え、詩經の直系に楚辭を位置づけている。「春秋之後、周道寢壞、聘問歌詠不行於列國、學詩之士逸在布衣、而賢人失志之賦作矣。大儒孫卿及楚臣屈原離譏憂國、皆作賦以風、咸有惻隱古詩之義。其後宋玉・唐勒、漢興枚乘・司馬相如、下及揚

子雲、競爲修麗、閎衍之詞、沒其風諭之義」。屈原の離騷は「惻隱古詩之義」の有ることによって詩經の後繼に置かれ、宋玉以下は「風諭之義」を喪つてゐるとして排斥される。いまこの仕方を踏まえながら、しかし屈原と宋玉以下の違いにはこだわらず、ここでは「風諭」に換えて「變風」の概念を援用する。詩經で周南・召南を、王道が行われていた時代のうた「正風」とするのに對し、邶風以下を亂れた時代のうた「變風」とする。『毛詩』大序に「至于王道衰、禮義廢、政教失、國異政、家殊俗、而變風變雅作矣」。ここでは楚辭を詩經の「變風」として後繼に位置づけるのである。

なおこの部分、表現は盧藏用「右拾遺陳子昂文集序」(『全唐文』卷三三八)の「孔子歿二百歲而騷人作、於是婉麗浮侈之法行焉」を承ける。ただし、盧藏用の「婉麗浮侈」が否定的な評價であるのに對して、于頔の「婉麗」は華麗なさまをいい、肯定的な評價であるという、見逃すことのできない違いがある。

第二段は漢代における詩の演變を五言詩に絞って述べる。

至西漢、李陵蘇武始全爲五言詩體。源於風、流於

騷、故多憂傷離遠之情。梁昭明所撰文選、錄古詩十九首、亡其名氏。觀其辭、蓋東漢之世、亦蘇李之流也。

漢代にいたって、李陵と蘇武がはじめて五言詩のスタイルを完成した。詩經に源を發し、離騷に流れを汲む、ゆえにその内容は憂い傷み別れを悲しむ氣持に満ちている。梁の昭明太子蕭統の編纂した文選には古詩十九首を編録しているが、作者の姓名は失われている。その措辭を見るに、たぶん後漢の世の作であり、これもまた蘇武李陵の流派である。

漢代辭賦の作家を並べるのが通常の文學史の書き方だが、ここでは一切省略する。五言詩を中心とした文學史記述は鍾嶸『詩品』序に倣うかに見える。そこでは李陵・蘇武を五言詩の發祥とし、古詩十九首をあとにつけ、王楊枚馬には詩がないとし、班婕妤、班固を挙げる。「逮漢、李陵、始著五言之目矣。古詩眇邈、人世難詳、推其文體、固是炎漢之製、非衰周之倡也。自王楊枚馬之徒、詞賦競爽、而吟詠靡聞。從李都尉迄班婕妤、將百年間、有婦人焉、一人而已。詩人之風、頓已缺喪。東京二百載中、惟有班固詠史、質木無文」。この前半部分を取

り、前漢に李陵・蘇武を、後漢に古詩十九首を配する。

漢代辭賦の作家以下は切り捨てる。ただし李陵・蘇武の詩は、ふたりの事跡を踏まえた偽作であると今では見なされている。このことについては早くから疑義があり、例えば劉勰『文心雕龍』明詩には「李陵・班婕妤見疑於後代也」という。その一方で『詩品』の他、『文選』卷二九に李陵・蘇武の作とするなど、大方の見方はこちらのほうにある。皎然も『詩式』卷一、李少卿竝古詩十九首に、「其五言、周時已見濫觴、及乎成篇、則始於李陵、蘇武」という。于頔もこれに従う。

古詩十九首について、『文選』卷二九には無名氏の作として収録し、徐陵『玉臺新詠』にはうち八首を漢の枚乗作とするが、李善は「竝云古詩、蓋不知作者。或云枚乗、疑不能明也」といい、いまこちらの見方を踏襲する製作年代について、『詩品』序では前漢の作と見ているようだが、ここでは後漢の作とする。この見方は現在においてもほぼ定説となっている。なお、皎然の後漢の作である根拠として、このうち二首の作者の名を挙げている。『詩式』卷一、李少卿竝古詩十九首に「十九首、辭精義炳、婉而成章、始見作用之功。蓋東漢之文體、又如冉冉孤生竹、青青河畔草、傅毅・蔡邕所作。以此而論、

爲漢明矣」。于頔序の記述は、この點において皎然の認識と齟齬を生じていることになる。

第三段は魏晉の詩を、王粲と曹植、陸機と潘岳に代表させて述べる。

洎建安中、王仲宣曹子建鼓其風、晉世陸士衡潘安仁揚其波。王曹以氣勝、潘陸以文尙。氣勝者魏・興武功於二京已覆、文尙者晉武亡帝圖於五胡肇亂。觀其人文興亡之跡、人焉庾哉、人焉庾哉。

建安年間より、王粲と曹植が風を起こし、晉代では陸機と潘岳が波を揚げた。王粲曹植は氣迫にまさり、潘岳陸機は文彩がすぐれる。氣迫にまさるのは魏の太祖が武功を兩京陷落の際に立てたとき、文彩がすぐれるのは晉の武帝が帝國のはかりごとを五胡の擾亂にきつかけに失ったときだ。文化の興亡の跡を観るに、そのひとの文才は隠せない、隠せないものだ。

『詩品』序は建安と太康に分け、それぞれ曹氏父子劉楨王粲、三張二陸兩潘一左をあげていた。「降及建安、曹公父子、篤好斯文、平原兄弟、鬱爲文棟、劉楨王粲、

爲其羽翼。…太康中、三張一陸、兩潘、一左、勃爾復興、踵武前王、風流末沫、亦文章之中興也」。これをひとくくりにし、代表詩人も半分に絞る。

文學觀については『宋書』卷六七、謝靈運傳論を踏まえる。それは文學の演變を評價し文飾を肯定する視點によつて書かれてゐる。そもそも詩歌は民の自然な情の發露により、内なる志がうたとして外に發したものである。周が衰えると麗しい文學の傳統はいよいよ顯著になる。

屈原・宋玉・賈誼・司馬相如らが華麗な措辭と高尚な内容によつて創作し、王褒・劉向・揚雄・班固・崔駰・蔡邕がさらに情趣と志向を多樣に推し廣げる。「民稟天地之靈、含五常之德、剛柔迭用、喜愠分情。夫志動於中、則歌詠外發。…周室既衰、風流彌著。屈平宋玉、導清源於前、賈誼相如、振芳塵於後、英辭潤金石、高義薄雲天。自茲以降、情志愈廣。王褒劉向、揚班崔蔡之徒、異軌同奔、遞相師祖。雖清辭麗曲、時發乎篇、而無音累氣、固亦多矣」。否定されるべきは風論の喪失による一代の文學全體ではなく、名作の一方で多量に生じる駄作である。そこでは建安文學は内容を包む表現のあやによつて評價されていた。「至于建安、曹氏基命、二祖陳王、咸蓄盛藻、甫乃以情緯文、以文被質」。また太康文學は修辭と

韻律によつて評價されていた。「降及元康、潘、陸、特秀、律異班賈、體變曹王、經旨星稠、繁文綺合。綴平臺之逸響、採南皮之高韻、遺風餘烈、事極江右」。ここでは建安文學を修辭の側面においてみる觀點は捨て、建安を「氣」に、太康を「文」に代表させるといふ、割り切つた構圖を採る。

末節の表現は『論語』爲政の「視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉」を援用したものである。第四段は南朝宋の文學を謝靈運ひとりに代表させて述べる。

宋高祖平桓玄定江表、文帝繼業五十年間、江左寧謐。魏晉文章、鬱然復興。康樂侯謝靈運、獨步江南、俯視潘陸。其文炳而麗、其氣逸而暢。驅風雷於江山、變晴昏於洲渚、煙雲以之慘淡、景氣爲其澄霽。信江表之文英、五言之麗則者也。

宋の高祖が桓玄を討つて江南を平定し、文帝がその業績を繼いで五十年間、江南の地は穩やかであった。魏晉時代の文學が盛んに復興した。康樂侯の謝靈運は江南の地にひとり抜きん出、潘岳と陸機を見下ろした。その文章は輝いて華麗、その氣質はすぐ

れてのびやか。風と雷を山川に驅り、晴と曇を水邊に起こし、雲が生じて暗くなるかと思えば、景色が晴れてすみわたる。まことに江南の文學者の英華であり、五言詩の典麗文雅なものである。

謝靈運を文學史の頂點に位置づける發想は、ほかでもなく『宋書』謝靈運傳論に見られるものだが、それは特徴的な「文體三變」説とともに示されている。その説は、漢代より建安までを古典時代と見なし、文學のスタイルが「形似」の司馬相如、「情理」の班固を経て、「氣質」の曹植・王粲へと展開する、というものだ。要點は、前二者を踏まえて、建安文學が飛躍を遂げたと言うところにある。「自漢至魏、四百餘年、辭人才子、文體三變。相如巧爲形似之言、班固長於情理之説、子建、仲宣、以氣質爲體、竝標能擅美、獨映當時」。すなわち、續く近現代の記述において、太康文學、東晉文學のあとに宋代文學を挙げ、韻律文飾に秀でる謝靈運をひとつの到達點に位置づけるのは、建安文學が飛躍を遂げたのとちょうど對應する關係になっている。そこには編者沈約みずからの音韻理論を顯彰するという意圖が含まれている。『詩品』序に、建安の曹植、太康の陸機と比べて、元嘉の謝靈運

を挙げ、三者を五言詩の頂點に位置づけるのも、この三變説が影響している。「陳思王爲建安之傑、公幹、仲宣爲輔。陸機爲太康之英、安仁、景陽爲輔。謝客爲元嘉之雄、顏延年爲輔。斯皆五言之冠冕、文詞之命世也」。いま兩漢文學、魏晉文學に引き續いて、宋代文學を謝靈運に代表させて相應の紙幅を割く仕方は、この三變説が基底に作用しているかに見える。なお皎然は、時代區分については明記しないが、漢から唐までに文體が四變したと述べている。『詩式』卷一、序に「洎西漢以來、文體四變」。

謝靈運を過去の詩人に引き比べ、古今に冠絶するという表現は、『詩品』序に見える。「元嘉中、有謝靈運、才高詞盛、富豔難踪、固已含跨劉郭、凌轢潘左」。同様の發想と表現は、唐代の復古文學史觀にもとづく論の中に移植されてしばしば見える。盧藏用「右拾遺陳子昂文集序」に「崛起江漢、虎視函夏、卓立千古、橫制頽波」。李陽冰「唐李翰林草堂集序」(『全唐文』卷四三七)に「馳驅屈宋、鞭撻揚馬、千載獨步、惟公一人」。

皎然の謝靈運に對する評價は、『詩議』に、時代が降るにつれ浮華におもむき風格がうしなわれるなかで、ひとりその衰えた風潮を引きとめる者、として見える。「正始中、…論其代、則漸浮侈矣。晉世尤尚綺靡。…宋

初文格、與晉相沿、更顯頽矣。論人、則康、樂、侯、秉獨善之姿、振頽靡之俗。沈建昌評、自靈均以來、一人而已」。

また『詩式』卷一、文章正宗には、その文學が内容と修辭ともに優れることを風景描寫の比喻とともに述べ、古今文學史の中心に位置づけている。「曩者嘗與諸侯論康樂爲文、眞於情性、尙於作用、不顧詞彩、而風流自然。彼清景、當中、天地秋色、詩之量也。慶雲從風、舒卷萬狀、詩之變也。不然、何以得其格高、其氣正、其體貞、其貌古、其詞深、其才婉、其德容、其調逸、其聲諧哉。至如述祖德一章、擬鄴中八首、經廬陵王墓、臨池上樓、識度高明、蓋詩中之日月也、安可攀援哉。：故能上躡風騷、下超魏晉。建安製作、其椎輪乎」。于頔の記述はこれに論旨を取り、簡潔に述べたものであろう。

その他、「魏晉文章、鬱然復興」の表現は、『詩品』序の「太康中、三張二陸兩潘一左、勃爾復興」に似る。「麗則」の語は、『漢書』藝文志・詩賦略に揚雄「法言」を引いて「詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫」とあるのにもとづく。于頔「郡齋臥疾贈書上人」詩にも「麗則風騷後、然公我詞客」とあった。

第五段は齊の文學を謝朓に代表させて述べ、梁陳以降の文學に低い評價を與える。

迫於齊世、宣城守謝玄暉、亦得其辭調、涵於氣格、不作康樂矣。梁陳已降、雖作者不絕、而五言之道、不勝其情矣。

齊の時代になって、宣城太守謝朓も、また修辭・音韻を會得し、氣韻・格調にあふれていたが、謝靈運ほどではない。梁陳以降、作者は絶えなかったが、五言詩の歴史のなかでは、内容をじゅうぶんに反映する器であつたとはいえない。

謝靈運と謝朓の關係について、より近い時代、『詩品』中品には、謝朓を謝靈運に出るとする。「其源出於謝混」。

謝混は玄言詩の風を改め謝靈運の山水詩を導いたと評價される詩人。『宋書』謝靈運傳論に「仲文始革孫許之風、叔源大變太元之氣。爰逮宋氏、顏謝騰聲」。『詩品』序に「逮義熙中、謝益壽斐然繼作。元嘉中、有謝靈運、才高詞盛、富豔難踪」。『世說新語』文學、八五、劉注引『續晉陽秋』に「至義熙中、謝混始改」。すなわち同じ淵源をもつことにより、兩者は間接的に繋がる。

皎然の『詩議』で、謝靈運のあとに、江淹、鮑照、謝朓、何遜を挙げる。「此後、江寧侯溫而朗、鮑參軍麗而氣多、雜體從軍、殆凌前古。恨其縱捨盤薄、體貌猶少。

宣城、公情致蕭散、詞澤義精、至於雅句殊章、往往驚絕。何水部雖謂格柔、而多清勁、或常態未剪、有逸對可嘉、風範波瀾、去謝遠矣」。また「七言述祖德贈湖上諸沈」詩（集卷二）では先祖として、謝靈運、謝惠連、謝尚、謝朓を挙げる。「我祖文章有□名、千年海內重嘉聲。雪飛梁苑採奇賦（梁苑出惠連公雪賦）、春發池塘得佳句（康樂云、池上樓詩、夢惠連、方得池塘生芳草之句）。世業相承及我身、風流自謂過時人。初看甲乙矜言語、對客偏能鵲鵲舞（尚公少年善焉）。…昔時軒蓋金陵下、何處不傳沈與謝（田公與約、俱是西邸八友）。綿綿芳籍至今聞、眷眷通宗有數君」。現代の文學史の評價は、謝靈運の山水詩に依然として濃厚であつた宗教風味が拂われたところに謝朓の風景詩がある、というものである。謝靈運と謝朓を直接繋ぐ于頔の仕方は、皎然の系譜を短い紙幅に載せるための割り切った處置ではあるが、結果としてこれにちかい。

南朝後期を否定する文學史の見方は唐初の正史に端を發する。『周書』王褒庾信傳論では北朝の文學が南朝に劣らぬことを述べながら、庾信が梁陳「亡國の音」を流布させたと指彈する。『隋書』文學傳序では南北を並列しながら、南朝梁以降は衰えてゆく過程であり北朝に惡

い影響をあたえたとする。南朝前期が否定的評價の對象にならないのは、すでに『宋書』謝靈運傳論や『南齊書』文學傳論が存在していることに加えて、唐代文壇の實作と文學觀それ自體が南朝文學を基盤に成り立っているからである。初盛唐期の復古文學主義者はこのような唐朝の公式的見解をとらえて南朝文學を否定しにかかる。そこで採用される、ひとつながりの文學史をなかほどで切り評價を二分する論法は、『漢書』藝文志・詩賦略に辭賦文學を「賢人失志之賦」と「侈麗閎衍之詞」に分けて以來のものである。陳子昂「與東方左史虬修竹篇書」（『全唐詩』卷八三）に「僕嘗暇時觀齊梁間詩、彩麗競繁、而興寄都絕」。盧藏用「右拾遺陳子昂文集序」に「宋齊之末、蓋顛頽矣。逶迤陵積、流靡忘返」。李白「古風」五十九首、其一（『全唐詩』卷一六一）に「自從建安來、綺麗不足珍」など。否定の對象は次第に前の時代へと遡る。

その他、「氣格」は皎然が曹植に對する評價用語として用いている。『詩式』卷一、鄴中集に「鄴中七子、陳王最高、…氣格自高、與十九首其流一也」。

第六段は皎然の作風が謝靈運を受け繼いでいることを述べる。

有唐吳興開士釋皎然字清晝、即康樂之十世孫。得詩人之奧旨、傳乃祖之菁華、江南詞人、莫不楷範。

極於緣情綺靡、故辭多芳澤、師古興制、故律尚清壯。其或發明玄理、則深契眞如、又不可得而思議也。

唐の吳興の高僧、釋皎然、字は清晝は、すなわち謝康樂の十世の孫である。詩經の作者の奧義を得、先祖の精華を傳え、江南地方の詩人は、規範としなものではない。思いを述べるのにうつくしさを極める、ゆえにことばは香しく艶があり、古を則として制作する、ゆえに韻律は清らかで壯麗であることを尊ぶ。奥深いことわりを明らかにしようとして、眞理にふかく契合しているのは、さらに深遠で思議することのできないものだ。

皎然是湖州長城の人。「五言早春書懷寄李少府仲宣」詩（集卷二）序に「豫故里在長城下山。昔歲屬狂寇陷沒江左、親故離散、永望粉梓、不覺傷懷」。俗姓は謝、晩年は字を用い「晝」と稱した。于頔「郡齋臥疾贈晝上人」詩、原注に「上人早名皎然、晩字晝」。七代の祖が吳興太守であり、その舊居である墅に幼少時代を過した。「五言賦得謝墅送王長史」（集卷六）序に「其墅即晝

七代祖吳興守舊居」、詩に「世業西山墅、移家長我身。蕭疎遺樹老、寂寞廢田春。車巷傷前轍、籬溝憶舊鄰。何堪再過日、更送北歸人」。賈晉華の考證によれば、「七代の祖」とは謝朓のこと、謝安五世の孫にあたる人物。したがって皎然は謝安十二世の孫にあたる。謝靈運からは傍系にあたり、靈運の孫の超宗が謝朓と同輩であることから、正しくは傍系九世の後裔となる、という。『皎然年譜』三—六頁參照。

文學の正統を承け、江南詩人の規範となる。その文學は詞藻と韻律にすぐれる。評價軸を謝靈運と同じくしながら、佛僧としての評價がそこに加わる。「郡齋臥疾贈晝上人」詩にもその文學と佛教とを對にして述べていた。「夙陪翰墨徒、深論窮文格。麗則風騷後、然公我詞客。晚依方外友、極理探精蹟。朐合南北宗、晝公我禪伯。」また「芳澤」の語はそこでも使われていた。「隨順令得解、故我言芳澤」。

第七段は皎然文集編纂の経緯について述べる。

貞元壬申歲、餘分刺吳興之明年、集賢殿御書院有命徵其文集。餘遂採而編之、得詩筆五百四十六首、分爲十卷、納於延閣書府。上人以餘嘗著詩述論前代

之詩、遂託餘以集序。辭不獲已、略志其變。

貞元壬申の歲、わたくしが吳興に赴任した明くる年、集賢殿御書院よりその文集を召し出すようにとの命が下った。わたしはかくてこれを探取して編集し、詩文五百四十六首を得、分けて十卷とし、宮廷の書庫に納めた。上人はわたしがかつて前代の詩について論述があることから、そのままわたしに文集の序を書くことを託された。辭退しようとしたがやむを得ず、その文學史上の意義をあらまし記した。

勅文「敕浙西觀察使牒湖州當州皎然禪師集」は「四部叢刊」所收、上海涵芬樓影印江安傅氏雙鑑樓藏景宋寫本『畫上人集』卷首に附せられている。「牒。得集、賢、殿、御書、院、牒、前件集、庫內無本、交闕進奉。牒使請速寫送院訖垂報者、牒州寫送使者。故牒。貞元八年正月十日牒。都團練副使權判兼侍御史李元、使潤州刺史兼御史中丞王緯」。

明の毛晉汲古閣本『杼山集』十卷には本編に五百四十首、補遺に五首、併せて五百四十五首の詩と文を収める。『全唐詩稿本』に十七首、『全唐詩』に七首を新たにに加え、都合五百六十九首が遺る。ただし『全唐詩稿本』の

加えたうち四首は本編と重複している。現行の『杼山集』は詩七卷、碑誌讀書序二卷、聯句一卷の計十卷からなる。

「著詩述論前代之詩」の部分は四部叢刊本には「書述論前代之詩」と作り、テキストが亂れているようだ。いずれも読みにくいのが、于頔が詩を論ずる書を著わしていたことをいうと思われる。彼は後に『龐居士語錄』を編むことになるが、より初期に文學關係の著述があつたことがこれによつて知られる。

「略志其變」の表現は、盧藏用「右拾遺陳子昂文集序」の「故粗論文之變、而爲之序」を踏まえよう。

第八段は皎然の佛教と詩作について撰者の考えを述べる。

上人之植性清和、稟質端懿、中祕空寂、外開方便。妙言說於文字、了心境於定惠、又釋門之慈航智炬也。餘游方之內者、何足以扣玄關。謝氏世爲詩人、豈佛書所爲習氣。云爾。

上人はもちまゑが清く和やか、性質が正しくうるわしく、心中に空の境地を秘め、說法によつて衆生を解脱へと導く。ことを文字に記せば絶妙、定と

慧の心境をわかっており、さらに佛門のよき導き手でもある。わたしは俗世間に身を置くもの、奥深い關門を叩く資格などどうしてあろう。謝氏は歴代詩人の家柄、佛書の習いだということがどうしてあろう。以上のとおり。

詩作と佛道修行の關係について、皎然自身は佛道の妨げになるとしてしばらく詩作をやめたことがあった。世事にかかわるのは禪者の意とするところではなく、文筆活動が自身の本性をみだすと、實際に筆と硯とを遠ざけたという。『詩式』卷一、中序に「貞元初、豫與二三子居東溪草堂、每相謂曰、世事喧喧、非禪者之意。假使有宣尼之博識、胥臣之多聞、終朝目前、矜道修義、適足以擾我真性。豈若孤松片雪、禪坐相對、無言而道合、至靜而性同哉。吾將深入杼峰、與松雪爲侶。所著詩式及諸文筆、併寢而不紀。因顧筆硯曰『我疲爾役、爾困我愚、數十年間、了無所得。況你是外物、何累於我哉。住既無心、去亦無我。豫將放爾、各還其性、使物自物、不關於豫、豈不樂乎』。遂命弟子黜焉」。

以上まとめると、于頔序の文學觀・文學史觀は、文學

の發展變化を評價する『宋書』謝靈運傳論に基礎をおく。皎然が當の謝靈運の後裔であるということが、書き方の方針を決している。これは當時の文學觀の標準をなすものでもあり、于頔自身の文學觀を反映しているといえる。文學の評價基準は、「氣・格」を中心とし、詞藻と音韻を重んじるが、理論的な側面において新味はない。復古文學史觀の要素についても、標準化された言い方を取り入れたものである。皎然『詩議』『詩式』をはじめ、構成から措辭まで、古今さまざまな文學史テキストの要を摘み、ひとつにまとめあげた手際にこそ、最もおおきな特徴を見いだすことができる。

三

皎然の文學史觀と于頔との差異について略述しておく。皎然の文學史の見方には下降史觀が濃厚である。

詩教殆淪缺	詩教 殆ど淪缺し
庸音互相傾	庸音 互いに相傾く
忽觀風騷韻	忽として觀る 風騷の韻
會我夙昔情	我が夙昔の情に會う
蕩漾學海資	蕩漾たり學海の資

鬱爲詩人英 鬱として詩人の英爲り

格將寒松高 格は寒松と將に高く

氣與秋江清 氣は秋江と與に清し

何必鄴中作 何ぞ必ずしも鄴中の作の

可爲千載程 千載の程と爲るべきのみならんや

〔五言荅蘇州韋應物郎中〕集卷二

說詩迷類靡 詩を説きては類靡に迷い

偶俗傷趨競 俗に偶いては趨競を傷む

〔五言荅鄭方回〕集卷二

文學の歴史を風諭機能の喪失においてとらえる見方は、『漢書』藝文志・詩賦略を規範とし、初盛唐の文學史記述に援用された。それらは目的に應じ、掲げる價值基準にも相違がある。そもそも『周書』王褒庾信傳論では北朝を中心とした文學史記述をなすために、『宋書』謝靈運傳論の文學觀によりながら、『漢書』藝文志・詩賦略の論法によって南朝後期の文學を排斥し、その悪い影響が北に及んだとしたのであった。これを契機に陳子昂「與東方左史虬修竹篇書」及び盧藏用「右拾遺陳子昂文集序」の文學史が書かれる。前者は自身の詩の試み「興

寄」を宣揚するために、下降史觀による詩史を構え齊梁以下を排斥した。後者は陳子昂の文學を顯彰するために、彼の主張を文學史全般に廣げ宋齊以下を排斥した。ある基準を掲げてそれにあわないものを排斥するこの論法は、過去の文學について評價を下しながら、實際に存在する勢力に對して自身の立場を主張する、政治的なディスクールである。李白や盛唐の古文先驅者がこれによったのも、政治を牛耳る舊來の勢力に對抗する意圖を持つてのことであつた。唐代文學史は、こうして下降史觀のなかに収まることになり、それは盛唐古文先驅者の旗印ともなつたが、文學の發展變化を肯定しながら修辭への傾きを否定する矛盾は覆い隠されたままであつた。皎然は、文學の下降史觀によりながら、評價基準を謝靈運とするという「行き方をとる。その文學史觀は『詩議』に見える。

古詩以諷教爲宗、直而不俗、麗而不巧、格高而詞溫、語近而意遠、情浮於語、偶象則發、不以力制、故皆合於語、而生自然。建安三祖七氏、五言始盛、風裁爽朗、莫之與京。然終傷用氣使才、違於天真、雖忘從容、而露造跡。正始中、何晏嵇阮之儔也、嵇興高逸、阮旨閑逸、亦難爲等夷。論其代、則漸浮侈

矣。晉世尤尚綺靡。…宋初文格、與晉相沿、更顯頽矣。論人、則康樂侯秉獨善之姿、振頽靡之俗。沈建昌評、自靈均以來、一人而已。

古詩十九首は諷教を宗とし、語は平易だが遠いおもむきがあり自然。建安詩は爽やかであるが、才氣に過ぎ天真をうしなう。正始の時代は浮侈におもむき、晉代は綺靡をとうとぶ。宋では文の格調は憔悴した。その衰えた風をひとり引き受けて立つのが謝靈運であると。こうした詩人像は、盧藏用「右拾遺陳子昂文集序」や李陽冰「唐李翰林草堂集序」に描かれる陳子昂や李白の像に等しい。皎然『詩式』卷三にも「論盧藏用陳子昂集序」という評論があり、『詩議』の謝靈運像が盧藏用序の影響のもとに書かれていることは明らかである。謝靈運の文學については『詩式』卷一、文章正宗にいう。

眞於情性、尙於作用、不顧詞彩、而風流自然。…其格高、其氣正、其體貞、其貌古、其詞深、其才婉、其德容、其調逸、其聲諧哉。

まことの氣持ちともちまえに忠實に、それがことばに

あらわれて詩の表現となり、ことさらな修辭に氣を遣わず、おもむきは自然である。格調と風氣、文體と措辭、才能と人徳、音聲と韻律など、文學を構成する要素が高い水準で備わっている。こうして過去の文學史觀において對立する要素であつたものが、皎然においては矛盾なくおさまることになる。彼の論は大枠を下降文學史觀にとりながら、謝靈運を基準とすることで、從來のような内容と表現の對立とはならない。『詩式』卷四、齊梁詩にいう。

夫五言之道、惟工惟精。論者雖欲降殺齊梁、未知其旨。若據時代、道喪幾之矣。詩人不用此論。何也。如謝吏部詩：柳文暢詩：王元長詩、…亦何減於建安。…如王筠詩：庾肩吾詩：沈約詩、…格雖弱、氣猶正。遠比建安、可言體變、不可言道喪。

五言詩はこまやかでなければならぬ。齊梁詩をこきおろす論調があるが、時代の價值道徳が喪われたのはとおのむかしだ。詩においてはそうでない。齊梁の作にも建安に減じないものがある。また風格は弱いとはえ氣風はただししいものがある。これは變化したというべきであ

り、道が喪われたとはいえない。下降文學史のなかに、變化發展を重んずる『宋書』謝靈運傳論の文學觀が折衷される。排撃すべき對象も違つたものとなっている。

大曆中、詞人多在江外。皇甫冉・嚴維・張繼・劉長卿・李嘉祐・朱放、竊占青山・白雲・春風・芳草、以爲己有。吾知詩道初喪、正在於此。何得推過齊梁作者。迄今餘波尙寢、後生相效、沒溺者多。大曆末年、諸侯改轍、蓋知前非也。

大曆中、皇甫冉や嚴維ら多くの詩人は江南の地にあつておだやかな自然の風物を詠み、わがものとしたように思つたが、詩道の喪失とはこのことだ。齊梁の作者を批判するところではない。いまに至るまでその間違つた作風に追従するものは多い。大曆末年にいたり、ようやく彼らは間違ひに氣付き、行いを改めたようだ。盛唐の復古主義者の論とは、内容・用途ともにおおきく様變わりしたものとなっている。

皎然が初盛唐以來の下降文學史の影響下にありながら、その枠組みのなかで謝靈運を基準としたのは、彼がその後裔であるという事情が作用したことではあるが、一方

で、杜甫のような内實と表現とを兼ね備えた作家の實作を積んだあとのことであり、時代の流れに沿ひ文學の實質に近づいたものであつたといえよう。

于頔の批評には、皎然本人に濃厚な下降史觀はみえない。それは于頔詩冒頭の皎然文學への評價によく示されている。

夙陪翰墨徒 夙に翰墨の徒に陪し
深論窮文格 深く論じて文格を窮む
麗則風騷後 麗則あり 風騷の後
然公我詞客 然公 我が詞客なり

詩經と楚辭のあとに華麗で則のある文學をうち立てたと。于頔の詩論關係の論述が失われたいま、確實なことは言えないけれども、皎然本人の文學史テキストによりながら、下降史觀が表面的なたちでしか取りこまれていないのは、于頔本人の考え方にそれに與する部分がないからであらうと思われる。

(本學教授)